

DPT（三種混合）ワクチンは BCG よりも優先して 3 か月から開始しましょう

【DPT ワクチン】

DPT(三種混合)ワクチンは百日咳、破傷風、ジフテリアを予防するワクチンです。特に生後6か月未満の赤ちゃんが百日咳にかかると無呼吸になるなど重症化しやすく死亡率も高いことが知られています。海外の統計でも百日咳死亡例の大半は生後4か月未満です。従って諸外国では DPT の接種時期は生後2か月から勧奨している国がほとんどで、生後4か月以降の接種を推奨する国は1つありません。**4か月以降の開始では百日咳の死亡を防ぐことができないからです。**

特に最近では日本人の成人百日咳が増加していることも指摘され、成人(ご両親)から赤ちゃんに感染し重症化する事例も多数報告されています。本来は日本でも DPT ワクチンは WHO の推奨に従い2か月頃の開始が望ましいのですが、残念ながら日本のワクチン行政は20年前のまま何の修正も行われていません。そして3か月以下の重症百日咳児が多数おられるのが現実です。

赤ちゃんを適切に守るためには、**DPT(三種混合)ワクチンを3か月0週には開始できるように努力しましょう。**(現状では、多くの方が BCG 終了後の4~5か月以降に開始していますが、それでは DPT ワクチンの重要性が半減してしまいます。)

【BCG ワクチン】

BCG は結核の予防接種です。赤ちゃんが結核になると重症の結核性髄膜炎や粟粒結核になりやすいのですが、BCG はこれらを80~90%以上予防します。大阪市内など都市部では結核の罹患率が高く、**都市部居住の方には3~4か月の早期接種**をお奨めしています。

一方、あまり早期に接種すると、10万人に1人の重症免疫不全の患者さんに接種してしまう確率が高くなるため、通常は生後3か月未満の接種を避けます。ただ、重症免疫不全症の平均的な診断時期は生後5か月以降であり、生後3~4か月の時点でも未診断の事が多いことと、生後4か月以下の早期接種では BCG 骨炎の頻度が多いとの報告もあり、結核の少ない地域ほど BCG 接種時期を遅らせます。一方、遅れすぎると逆に重症結核のリスクが増えるためバランスが重要です。(日本の法令では法定接種期間が生後6か月未満であり、現状ではそれ以降の接種は推奨されません。)**当市は全国平均よりも結核が少ない為、通常は生後4か月末~5か月の時期をお奨めします。**全国では3か月から DPT、DPT、BCG(4か月半)、DPT という接種順が一般的です。

当院では、BCG の効果とリスクのバランスを赤ちゃんの生活環境に応じて個別に考慮し、

- ① 大阪市など結核罹患率の高い地域へよく出かける赤ちゃん
- ② 人ごみへ出る事が多い赤ちゃん
- ③ 身近に結核患者さんがおられて結核にかかる可能性が高い赤ちゃん

の場合は 生後3~4か月以下の早期接種をお奨めし、**それ以外の大多数の赤ちゃんは生後4か月末~5か月の時期にゆっくりと接種**することをお奨めします。(同時接種もできます。)

保育園児は通常、結核のハイリスクとは言えない為、BCG は一般児と同時期をお奨めします。